

第2 問題作成部会の見解

1 出題教科・科目の問題作成の方針（再掲）

- 英語以外の外国語については、大学入試センター試験の枠組みを受け継いだ『筆記』テストを課し、「リスニング」テストは実施しない。
- 教科としての外国語科の目標である「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」に基づき問題作成を行う。
また、実際のコミュニケーションを想定した明確な目的や場面、状況の設定を重視する。
- 問題作成に当たっては、CEFR等を踏まえた力を問うことをねらいとして作成する。
その際、大学教育の基礎力を踏まえ、また、高等学校において英語以外の外国語を初めて履修する者もいることを考慮し、問題作成を行う。

2 各問題の出題意図と解答結果

ここでは各問題を出題した意図のほか、個々の問題に関する意見についての問題作成側の見解を述べておく。

第1問 発音及び文法・語彙・表現に関する問題である。

- A 発音に関する問題である。問1は用言語幹末の終声字ㄷとㄷ의の発音を問う問題であり、問2は濃音化を問う問題である。
- B 空欄を補う問題である。語彙・文法・表現について正しい理解をしているかを問う意図があるが、単にある語彙やある文法を知っているか否かを問うのではなく、当該の語彙や文法形態が具体的な文脈において他の単語などどのように共起し、いかなる意味を実現するかという点に留意して出題した。全体的に、日本語母語話者にとって重要と思われる学習事項を出題するよう心がけた。
- C 語句の整序問題である。この問題は新傾向の問題として、今回初めて出題されたタイプのものである。韓国語は日本語と語順がほぼ同じであるため、韓国語文が日本語の直訳とならないようにした。全体として韓国語としての自然な表現を問うことに重きを置き、かつ日本語母語話者にとって重要と思われる学習事項を出題するよう心がけた。

第2問 日常生活でよく使われる表現を素材にして、文脈に沿って対話を完成させる問題と、対話の内容を理解し状況を把握する問題を作成した。全体的に使われている単語自体は難しくないが、状況を正しく把握する能力が要求される。

- A 家族間での会話を読み、その内容を正確に理解できているかどうかを測る問題が中心である。
 - 問1 空欄補充問題であるが、文脈から判断して適切な呼びかけを選ぶものであった。会話文を正確に読めていれば正答を導き出せる問題である。
 - 問2 空欄補充問題で、受験者にはなじみのある形式である。前後の文脈が分かれば正答にたどり着くのは容易い問題であった。
 - 問3 会話から情報を正確に読み取る問題である。会話文を正確に読めていれば正答にたどり着く問題といえる。
 - 問4 下線部の単語と同じ意味で用いられているものを選択する問題である。会話文を正確に読めていれば解けるはずである。

問5 本文の内容と一致するものを選ぶ問題である。本文の内容が読み取れれば正答に到達できる問題である。

B 店のオーナーと店員の会話である。メニューに対する説明が出てくるが、使われている語彙もそれほど難しくはなく、内容も理解しやすいものとなっている。

問1 空欄補充問題で、前後の文脈が分かれば正答を導き出せる問題である。

問2 空欄補充の組合せ問題である。組合せで若干難易度が上がっていると思われるが、前後の文脈が分かれば正答を導き出せる問題で、決して難しくない。

問3 空欄補充問題である。前後の文脈が分かれば正答を導き出せる問題である。

問4 会話文の内容と一致する文を二つ選ぶ問題であった。これも、会話文を正確に読めていけば正答を導けるはずである。

第3問 グラフや説明書など、日常生活で目にし得る素材を読み、その内容理解を問う問題である。読解力や情報収集力を駆使しながら、多様な資料に対して柔軟に対応できるか、といった点が肝要である。本試験と同じく昨年度に引き続き、共通テストに相応しい形にするため、問題作成に際して検討を重ねてきた。

A クーポンや募集案内など、日常生活で触れることのある素材を読み、その内容理解を問う問題である。

問1 商業施設の割引クーポンを素材とした内容一致問題である。商業用クーポンであるため内容自体は把握しやすいものの、複雑な選択肢を丁寧に読み込んで判別する必要がある。実用に即した良問といえる。

問2 学生寮の募集案内にまつわる内容一致問題である。キャンパス、収容人数、付帯施設など、それぞれ条件が複雑に組合さった内容を正確に把握することが肝要であり、比較的難易度は高かったと思われる。

B ある地方自治体のウェブサイトのトップページを素材とした問題である。

問1 複数の項目を読み、それらを束ねるにふさわしいタイトルを選択する問題である。難易度はそれほど高くないといえる。

問2 選択肢を読み込み、ウェブサイトと照らし合わせて一致しないものを選ぶ問題である。ウェブサイト利用者の立場から資料を読み解く良問といえる。

問3 資料の内容を正確に読み取れているかを問う内容一致問題である。資料の内容を細部にわたるまで把握している必要がある。

C 水陸両用バスの利用案内文とそこに含まれるバス運行表を素材とした問題である。

問1 旅行者が実際にできることはなにかを選ぶ内容一致問題である。多様な条件を複合的に組み合わせた選択肢になっており、正確かつ丁寧な読み込みが必要である。

問2 内容一致問題である。選択肢の内容と照らし合わせつつ正確に読み進めていく必要があるのはもちろんであるが、選択肢の数や分量が多い点で難易度はやや高かったといえる。

第4問 長文問題である。問題文は、自尊感情について論じたテキストであり、筆者の主張や本文に記述された内容を正確に読み取る力が要求される。

問1 ハングルで表記された漢字語の漢字表記を問う問題である。3題出題されたが、とりわけ(1)は選択肢に固有語も混在させるという新しい出題形式であったが、難易度はかなり低かった。

問2 本文の内容に照らし、「自尊心」があると思われる人を選択肢から選ぶ問題である。

問3 下線部の理由を選ぶ問題で、難易度はそれほど高くなかった。

- 問4 前後の文脈に照らして、適当な表現を選ぶ空欄補充の問題である。やや難易度の低い問題である。
- 問5 多義語の意味を問う問題である。下線部と異なる意味で使われているものを選ぶ形式で、難易度はそれほど高くない。
- 問6 空欄補充の問題である。直後の文章から導き出せるため、難易度は低めであった。
- 問7 空欄補充の問題である。文脈を考慮して、形が類似した慣用的表現を選ぶもので、難易度は低かった。
- 問8 文を適切な箇所に埋め込む問題である。本文全体の流れを俯瞰する必要があるため、難易度はやや高いと思われる。
- 問9 本文中に具体的に明記されているわけではなく、本文ではやや抽象的に書かれている内容から具体例を推測する力が要請されるため、難易度はやや高いと思われる。
- 問10 本文の内容一致問題である。本文全体を通して選択肢ひとつひとつを検討するため、難易度はやや高かったと思われる。

3 出題に対する反響・意見等についての見解

共通テストも3年目となり、実生活の中で接する文章を読んで問題解決を図る問題や、長文の中に漢字問題や文法問題を組み込むなどのこれまでの試みを定着させると同時に、並べ替え問題を新しく出題するなど、より実践的なコミュニケーション能力を重視した問題にするための工夫を行った。

第1問に関しては相変わらず発音や文法、語法の知識のみを問う問題であるという批判があった。このような指摘について、本部会の見解は以下の通りである。

多くの大学で、文理を問わず外国語科目を必修として課しているが、本部会としては大学における言語教育とは、「コミュニケーションの道具」としての言語能力のみならず、言語自体に注目することで人間の文化・社会の在り方や認知・行動の在り方、究極的には人間そのものの在り方について理解を深めていくという意味も含むものと理解している。また、言語を規則的・体系的に理解していくその過程は、まさに「論理的思考」や「思考力」を養う実践的過程でもあり、その過程を前提として「正確な発音・語彙・文法の知識を問う」ことは中等教育と大学教育を繋げる共通テストの意義という観点からも、妥当であると考えている。また、高校での授業の範囲を超える、又は高校教育の現場で取り上げられていない学習領域であるため、現在の第1問のような問題を出題すべきでないとの指摘については、その「問い方」については今後も改善の余地を追求していくべきと考える一方で、こうした趣旨の問題自体は現状程度には必要と本部会では認識している。つまり、語学学習において実用的運用能力を獲得するには「学習者主導の実践的学習」「アクティブ・ラーニング」が不可欠であり、学習者が教室で、教科書で学ぶ学習範囲に閉じこもらず、自ら関心を広げて実践的な韓国語に積極的に触れるような学習姿勢が不可欠であると本部会では認識しており、その意味で、より幅広い実践的経験を持つ学生が有利になるような出題も少数あることは重要であると考え。これは「知識だけを問う」のではなくむしろ「教室外での自律的・実践的学習を促す」つまり「幅広い実践的な韓国語に普段から進んで接することを促す」ものであると理解されたい。

問題作成の実際においても、短文の中で語の正しい発音や使い方を問うことにも意味がある。それらを会話文や長文においてのみ問うことには限界があり、逆に会話や長文の題材選びや問題作成に困難をきたすことが考えられる。よって、今後も発音や文法問題はなるべく文章の中に組み込む努力は続けるものの、第1問のような形式の問題は存続させる前提でこれからもより工夫を凝らすべきと思われる。

実用文の出題について、方式については未だ試行錯誤中だが、問題の質自体は前年度よりも更に向上した。そして以前からあった、受験者が読まなければならない文章の量が多く、これを今後も減らす努力が必要であるとの指摘についても改善の努力を続けており、今回はその面での指摘は余りなかった。

長文問題は、読解力や思考力を問う論説文のみ1題を出題する体裁を維持した。1つの長文に関する問いの数が増えたが、全体の配分を考えると適量であると評価された。今年度は、テーマにおいても配慮し、受験者が身近に感じるものが予想される心理的・哲学的内容になった。その結果、肯定的な評価が得られた。

昨年度に続き、今回の問題も高校入学以降の学習者にも十分解ける問題であると思われる。今後、より一層良質な問題の作成を目指していきたい。

4 ま と め

共通テスト開始に当たって実用問題を取り入れるなど新たな取組がなされて今年度で3回目となるが、まだ課題は残る。実用問題における題材や形式については、新しい試みであるだけに様々な可能性がある一方で、大学入試問題として許容される実用文の範囲をどう定めるかという基準設定の問題もあり、今後も議論を要する。長文問題においても、共通テストになってからは主に論説文から出題されてきたが、エッセイや文学作品、新聞記事など様々なジャンルの文章を出題できるようにすることについても検討していく必要がある。また、全体の分量に常に留意する必要がある。使用語彙や文法項目については学習範囲から適切に出題されているとの評価を頂いたので、今後この方針を維持していく。